

【研究ノート9】

「涅槃経」の遊行ルート

——特にガンガー河とガンダク河の渡河地点について——

森 章司

[1] 本稿は「涅槃経」に記された釈尊の最後の遊行の行程、就中パータリ村を出た後にガンガー河を渡ってヴェーサーリーに行かれるまでのルートと、竹林村において雨安居を過ごされてから3ヵ月後に入滅することを宣言され、その後にヴェーサーリーを出てパーリの「涅槃経」では次のバンダ村 (Bhaṇḍagāma) に到着されるまでのルートがどのようなものであったかをさぐることを主題とする。

この問題点をもう少し具体的にいえば、1つはパトナのところでちょうどガンダク河<sup>(1)</sup>が北西のほうからガンガー河本流に合流しているが、釈尊がパータリ村 (Pāṭaligāma) からガンガー河 (Gaṅgā) を渡られた時、その渡られた先の地点はガンダク河の右岸 (西側) であったのか、それとも左岸 (東側) であったのかということであり、これは釈尊がパータリ村のところでガンガー河を渡られてヴェーサーリーまで行かれた時、それはガンダク河の左岸を北上されたのか、右岸を北上されたのかということに関係する。本稿では前者を「ガンダク河左岸北上ルート」、後者を「ガンダク河右岸北上ルート」と呼ぶことにする。

そしてもう1つは、釈尊がヴェーサーリーを出て次のバンダ村に行かれたのは、ガンダク河を渡らないで河に沿ってそのまま北上されて、後で紹介するケーサリヤ (Kesariya) のところで渡河されたのか、それともヴェーサーリーのところで直ちにガンダク河を渡られて、その後河の右岸を北上されたのかということである。本稿では前者を「ケーサリヤ渡河ルート」と呼び、後者を「ヴェーサーリー渡河ルート」と呼ぶことにする。

なお「涅槃経」には次のようなテキストがあり、以下にはそれぞれ次のような略称を用いる。

*Mahāparinibbāna-suttanta* (DN. 016 ; PTS 版 vol. II p.72~) : 略称『パーリ』

*Mahāparinirvāṇasūtra* (Ernst Waldschidt ; Rinsen Book Co. 1986) : 略称『サンスクリット』<sup>(2)</sup>

失訳『般泥洹経』 (大正1 p.176 上~) : 略称『失訳』

白法祖訳『仏般泥洹経』 (大正1 p.160 中~) : 略称『白法祖』

『遊行経』 (仏陀耶舎共竺仏念訳『長阿含経』002 大正1 p.11 上~) : 略称『遊行』

法顕訳『大般涅槃経』 (大正1 p.191 中~) : 略称『法顕』

義浄訳『根本説一切有部毘奈耶雜事』巻35~39 (大正24 p.382 中~) : 略称『雜事』

- (1) この河の釈尊時代の呼び名ははっきりしない。われわれは *Sadānirā* がこれに相当するのではないかと考えている。ロミラ・ターパル『国家の起源と伝承』p.97には、「シャタパタ・プラーフマナ」にでるサダーニーラー川に括弧して「今日のガンダク川か？」と記入し、『パシヤムのインド百科』p.46はサダーニーラー川に括弧して「現在のガンダク川」としている。Joseph E. Schwartzberg の *A Historical Atlas of South-Asia* の South Asia in the Gupta-Vākāṭaka Age, c.300-550 には 'Gandakī' と記されている。

(2) これについては中村元著『遊行経』上・下 大蔵出版 1984年9月,1985年2月に収録されている和訳を参照させていただいた。

[2] 本稿は主に上記のような問題点を考えてみようとするものであるが、上記の問題点となる地名が釈尊の最後の遊行でどのような位置にあるのかを理解するために、まず最初に「涅槃経」に記された遊行における滞在地を紹介する。なお「涅槃経」の内容的な側面については、筆者の「サンガへの遺言の書としての『涅槃経』と結集」<sup>(1)</sup>を参照されたい。

(1) 『奥田聖応先生頌寿記念インド学仏教学論集』（奥田聖応先生頌寿記念論集刊行会編 俊成出版社 平成26年3月）

[2-1] まず初めに『パーリ』によってクシナーラーに到着されるまでの遊行において釈尊がどこに滞在されたかということとそこでどのようなことがあったかを簡単に紹介しておく。

王舎城・靈鷲山 (Gijjhakūṭa) : マガダ王阿闍世から派遣された大臣ヴァッサカーラ (Vassakāra) のヴァッジ族攻略が成功するかどうかの可否の質問に対して、七不退法を説かれ、またサンガに対しても七不退法その他を説かれる。(DN. vol.II p.072)  
アンバラッティカーの王の別荘 (Ambalaṭṭhikā Rājagāraka) <sup>(1)</sup> : 戒定慧の三学を説かれる。(p.081)

ナーランダラーのパーヴァーリカのマンゴー林 (Nālandā Pāvārikambavana) : 舍利弗と他心智についての問答をし、比丘らに戒定慧の三学を説かれる。(p.081)

パータリ村 : 人々の休息所 (āvāsathāgāra) で優婆塞らに持戒について説かれる。(p.084)

そのときマガダ国の二人の大臣であるスニーダ (Sunidha) とヴァッサカーラがヴァッジ族の侵入を防ぐためにパータリ村に城壁を築いていたが、パータリ村が立派な場所であるかぎり、商業の中心地であり、物資の集散地として栄えるであろうが、火と水と内部からの分裂という3種の災難があるであろうと記別される。(p.086)

パータリ村のスニーダとヴァッサカーラの家 : 食事に招待され、そこで布施の功德を説かれる。(p.088)

パータリ村の釈尊が出られた門とガンガー河を渡られた渡し場 : スニーダとヴァッサカーラはその門を「ゴータマ門 (Gotamadvāra)」、その渡し場を「ゴータマの渡し (Gotamatittha)」と名づける。(p.89)

コーティ村 (Koṭigāma) : 比丘らに四諦と戒定慧の三学を説かれる。(p.90)

ナーディカの煉瓦堂 (Nādika Giṅjakāvasatha) : 釈尊はここで亡くなった人々の死後を記別され、「法鏡」と名づける教え (Dhammādāsaṃ nāma dhamma-pariyāya) を説かれる。(p.91)

ヴェーサーリーのアンバパーリ園 (Ambapālī-vana) : 遊女アンバパーリーが翌日の食事を招待する。釈尊がここにおられることを聞いたリッチャヴィ族の人々が、ヴェーサーリーから出て (Vesāliyā niyyuṃsu) 園に行く途中でアンバパーリーに会い、翌日の招待の権利を譲ることを要求するが、アンバパーリーは断る。翌日アンバパーリーは食事を供養した後、園を「ブッダを上首とする比丘サンガ」に布施する。(p.94)

ベールヴァ村 (Beluva-gāmika) : 釈尊は比丘らに、「ヴェーサーリーの辺りで友人・知人・親友を頼って雨安居に入れ」と指示され、「私はここベールヴァ村で雨安居に入ろう」とベールヴァ村で雨安居に入られる。そのとき釈尊に恐ろしい病が起り、死ぬほどの激痛が走ったが、苦痛を耐え忍ばれ、阿難に「私は80歳になった。古ぼけた車が革ひもの助けによってかろうじて動くようなものだ」と語られる。(p.98)

ヴェーサーリーのチャーパーラ廟 (Cāpāla cetiya) : 寿行 (āyu-saṃkhāra) を捨てられる。(p.102)

重閣講堂 (Kuṭāgālasālā) : 釈尊はヴェーサーリー近辺に住しているすべての比丘を集め、3ヵ月後に入滅することを告げられる。(p.119)

バンダ村 : 釈尊はヴェーサーリーに乞食に入って食事を終えてから、象が眺めるように(身をひるがえして)ヴェーサーリーを眺めて阿難に、「これが私がヴェーサーリーを見る最後の眺めとなるだろう」と語られる。そしてバンダ村に到着され、そこに住される。(p.122)

ハッティ村 (Hatthigāma) : 特記すべき記事なし。(p.123)

アンバ村 (Ambagāma) : 特記すべき記事なし。(p.123)

ジャンブ村 : (Jambugāma) 特記すべき記事なし。(p.123)

ボーガ市 (Boghanagara) のアーナンダチューティヤ (Ānanda cetiya) : 釈尊は比丘らに四大教法を説かれる。(p.123)

パーヴァーのチュンダのマンゴー園 (Pāvā Cundassa ambavana) : 釈尊はチュンダに食事を招待され、その後に病気になって赤い血が迸り出る。(p.126)

クシナーラーへの途中の道脇の樹下 (rukkha-mūla) : 釈尊が水を所望されたので阿難は水を差し上げる。そのときアーラーラ・カーラーマの弟子であるマツラ族のプックサと禪定の深さについての問答をし、プックサは帰依して釈尊に絹の金色の衣を寄進する。(p.128)

クシナーラーへの途中のカクッター河 (Kakutthā nadī) : 釈尊は河で沐浴し、水を飲まれ、チュンダの供養は大いなる果報があると説かれる。(p.134)

ヒラニヤヴァティー河のマツラ族のクシナーラー・ウパヴァッタナ (Kusinārā Upavattana) の沙羅双樹の間 (antarena yamaka-sālānaṃ) : 入滅される。(p.137)

パーリの「涅槃経」の記述の概略は以上の通りであるが、滞在地だけを順序にしたがって列挙すると次のようになる。

王舎城・靈鷲山……アンバラッティカーの王の別荘……ナーランダのパーヴァーリカのマンゴー林……パータリ村の人々の休息所……パータリ村のスニダとヴァッサカーラの家……ゴータマ門……ゴータマの渡し……コーティ村……ナーディカ村の煉瓦堂……ヴェーサーリーのアンバパーリ園……ベールヴァ村……ヴェーサーリーのチャーパーラ廟……ヴェーサーリーの重閣講堂……バンダ村……ハッティ村……アンバ村……ジャンブ村……ボーガ市……パーヴァーのチュンダのマンゴー園……(クシナーラーへの途中) 道脇の樹下……カクッター河……ヒラニヤヴァティー河のクシナーラーのマツラ族のウパヴァッタナ

(1) Ambalaṭṭhika は DN.005 *Kūṭadanta-s.* では Khānumata という村にあり、この村はクータ

ダンタという名の婆羅門にピンピサーラ王から授けられた拝領地であったとされている。またこの王の別荘は *DN.001 Brahmajāla-s.*の舞台でもある。

[2-2] 前項の最後のまとめに倣って、念のために他の「涅槃經」における滞在地ないしは経由地だけを列挙しておく。

『サンスクリット』：王舎城・靈鷲山 (*Gr̥dhrakūṭa parvata*) (Ernst Waldschmidt p.102) ……竹園の近くの王の別荘 (*Rājāgārika*) (p.134) ……パータリ村のパータラカ靈城 (彼らの休息所) (*Pāṭaligrāmaka Pāṭalaka caitya*) (p.136) ……ガウタマ門 (*Gautamadvāra*) とガウタマの渡し (*Gautamatirtha*) (p.156) ……クティ村 (*Kuṭigrāma*) のシンシャパー林 (p.160) ……ナーディカー村 (*Nādikā*) (p.162) ……アームラパーリ園 (*Āmrāpālivaṇa*) (p.172) ……竹林村 (*Veṇugrāma*) (p.190) ……チャーパーラ廟 (*Cāpāla caitya*) (p.204) ……講堂 (*upasthāna-sālā*) (p.222) ……(ヴァイシャーリーの最後の眺め) (p.230) ……クシタ村 (*Kuṣṭhagrāmaka*) (p.230) ……ガンダ村 (*Gaṇḍagrāmaka*) (p.230) ……ドローナ村 (*Dronagrāmaka*) (p.230) ……シュールパ村 (*Śūrpagrāmaka*) (p.230) ……アームラ村 (*Āmrāgrāmaka*) (p.230) ……ジャンブ村 (*Jambuḅgrāmaka*) (p.230) ……ハスティグラマ村 (*Hastigrāmaka*) (p.230) ……ボーガ市 (*Boghanagara*) (p.230) ……パーパー村 (*Pāpā-grāmaka*) のジャルーカー叢林 (*Jalūkāvanaṣaṇḍa*) (p.252) ……パーパーとヒラニヤヴァティーの間 (p.264) ……ヒラニヤヴァティー河 (*Hiraṇyavati*) (p.282) ……ヒラニヤヴァティー河とクシナガリーとの間 (p.284) ……クシナガリーのウパヴァルタナ (*Kuśinagarī Upavartana*) の沙羅双樹の間 (p.294)

『失記』：王舎・鷄山 (大正 01 p.176 上) ……王園 (p.177 中) ……巴連弗城外の神樹下 (p.177 下) ……瞿曇門と瞿曇津 (p.178 上) ……**拘利邑** (p.178 中) ……喜予邑の河水辺の鍵祇樹下 (p.178 中) ……(拘利を楽しみ城中を歴めぐって去り) ……淫女奈氏の園 (p.178 下) ……竹芳邑 (p.180 上) ……急疾神地 (p.180 中) ……維耶離・猿猴館 (p.181 上) ……(城門を出た時最後に維耶離を見る) (p.181 下) ……**拘利邑** (p.181 下) ……健持邑 (p.181 下) ……掩滿邑 (p.182 上) ……出金邑 (p.182 上) ……授手邑 (p.182 上) ……華氏邑 (p.182 上) ……善淨邑 (p.182 上) ……夫延邑 (p.182 上) ……波旬国城外の禪頭園 (p.183 上) ……波旬から拘夷邑への道半ば (p.183 下) ……熙連河 (p.184 上) ……蘇連双樹の間 (p.184 下)

『白法祖』：王舎国鷄山 (大正 01 p.160 中) ……巴隣聚 (p.162 上) ……**巴隣聚** (p.162 中) ……仏城門と仏溪 (p.163 上) ……**拘隣聚** (p.163 上) ……喜予国鍵提樹下 (p.163 上) ……維耶梨国に未至七里の椋園 (p.163 上) ……(維耶梨国を出でて) 竹芳聚 (p.164 中) ……急疾神樹 (p.164 下) ……(維耶梨を振り返って再びここに来ることはない) (p.165 下) ……**拘隣聚**の尸舎洄園 (p.166 上) ……鍵梨聚 (p.166 上) ……金聚 (p.166 上) ……授手聚 (p.166 上) ……掩滿聚 (p.166 上) ……喜予聚 (p.166 中) ……華氏聚 (p.166 中) ……夫延城の北の樹下 (p.166 中) ……波旬国の 禪頭園 (p.167 下) ……鳩夷那竭国への道中 (p.168 上) ……醯連溪水辺 (p.168 下) ……塩呵沙 (施牀使北首) (p.169)

『遊行』：羅閱城・耆闍崛山 (大正 01 p.011 上) ……竹園 (p.012 上) ……巴陵弗城 (p.012 上) ……瞿曇門と瞿曇津 (p.012 下) ……拘利村 (p.013 上) ……那陀村 (p.013 上) ……菴

婆娑梨園 (p.013 中) ……毘舍離 (p.014 下) ……竹林叢 (p.014 下) ……遮波羅塔 (p.015 中) ……重閣講堂 (p.016 下) ……菴婆羅村 (p.017 中) ……瞻婆村 (p.017 中) ……捷茶村 (p.017 中) ……婆梨婆村 (p.017 中) ……負弥城 (p.017 中) ……波婆城の閣頭園 (p.018 上) ……中路の一樹下 (p.018 下) ……拘孫河 (p.020 上) ……拘尸城の末羅の双樹の間 (p.020 下)

『法顕』：毘耶離大林中重閣講堂 (大正01 p.191 中) …… (この城を見る最後。離車の人々悲しむ。世尊、七種法を説く。仏乾茶村に行かんとするが、人々が従って帰ろうとしないので、神力をもって河水を化作する。) (p.193 中~195 上) ……乾茶村の北林 (p.195 中) ……象村 (p.195 中) ……菴婆羅村 (p.195 中) ……閻浮村 (p.195 中) ……善伽城 (p.195 中) ……鳩娑村 (p.196 上) ……波波城 (p.197 上) ……鳩尸那城への中路の一樹下 (p.197 中) ……迦屈蹉河 (p.198 下) …… (熙連河を渡って) (p.199 上) ……鳩尸那城力士生地娑羅林中の双樹 (p.199 上)

『雜事』：王舎城鷲峯山 (大正24 p.382 中) ……波吒離邑の制底辺 (p.384 中) ……喬答摩門と喬答摩路 (p.385 中) ……小舎村 (1) の北の升摂波林 (p.385 中) ……販葦聚落村 (p.385 中) ……菴没羅林 (p.385 下) ……竹林の北の升摂波林 (p.387 上) ……広巖城の取弓制底樹 (p.387 下) …… (広巖城の西北園林の界にて振り返って最後の眺め) (p.388 下) ……重患村の升摂波林 (p.389 上) ……十余聚落を經過して…受用城の北林 (p.389 上) ……波波邑の折鹿迦林 (p.390 中) ……波波邑から金河への中間の路辺 (p.391 上) ……金河 (p.391 下) ……金河から拘尸那城への中間の路辺 (p.391 下) ……拘尸那城の沙羅双樹間 (p.392 中)

以上をできるだけ地名を対照させながら表示すると次のようになる。ただし行程の順序は『パーリ』を中心にしたものであり、諸文献において必ずしも一致しないから、正確には上記行程を参照されたい。なお？を付したものは、対応するかどうか不確かなものである。また『失訳』と『白法祖』において網を伏せた地名は同じ地名が2度現れるものである。

順番	パーリ	サンスクリット	失 訳	白法祖	遊 行	法 顕	雑 事
1	Gijjhakūṭa	Ḡḍhrakūṭa	鷓山	王舎国鷓山	耆闍崛山		鷲峯山
2	Ambalaṭṭhika Rājāgārika	Rājāgārika	王園				
3	Nālandā						
4	Pāṭaligāma	Pāṭaligrāma	巴連弗城外	巴隣聚	巴陵弗城		波吒離邑
5	Gotamadvāra	Gautamadvāra	瞿曇門	仏城門	瞿曇門		喬答摩門
6	Gotama tittha	Gautamatirtha	瞿曇津	仏溪	瞿曇津		喬答摩路
7	Koṭigāma	Kuṭigrāma	拘利邑	拘隣聚	拘利村		小舎村
8	Nādikā	Nādikā	喜予邑	喜予国	那陀村		販葦聚落
9	Ambapāli-vana	Āmrāpālivana	奈子園	捺園	菴婆婆梨園		菴没羅林
10	Beluva-gāmaka	Veṇugrāma	竹芳邑	竹芳聚	竹林叢		竹林
11	Cāpāla cetiya	Cāpāla caitya	急疾神地	急疾神樹	遮波羅塔		取弓制底

「涅槃經」の遊行ルート

12	Kuṭāgālasālā	Upasthāna-sālā	猿猴館	維耶梨国	重閣講堂	重閣講堂	取弓制底
13	Vesālī の眺め	Vaiśālī の眺め	維耶国の眺め	維耶離の眺め		毘耶離の眺め	毘耶離の眺め
		Kuṣṭhagrāmaka	拘利邑	拘隣聚			
14	Bhaṇḍagāma	Gaṇḍagrāmaka	健持邑	健梨聚	健茶村	乾茶村	重患村
		Dronagrāmaka					
		Śūrpagrāmaka					
15	Hatthigāma	Hastigrāmaka	授手邑	授手聚	婆梨婆村	象村	十余聚落
16	Ambagāma	Āmragrāmaka	掩満邑	掩満聚	菴婆羅村	菴婆羅村	
17	Jambuḡāma	Jambuḡrāmaka		金聚?	瞻婆村	閻浮村	
			華氏邑	華氏聚			
			善浄邑	喜予聚?			
18	Bhoganagara	Bhoganagaraka	夫延邑	夫延城	負弥城	善伽城	受用城
						鳩娑村	
19	Pāvā	Pāpāgrāmaka	波旬国	波旬国	波婆城	波波城	波波邑
20	rukkha-mūla	パーパーとヒラニヤヴァティーの間	波旬から拘夷邑への道半ば	鳩夷那竭国への道中	中路の一樹下	鳩尸那城への中路の一樹下	波波邑から金河への中間
21	Kakutthā nadi	Kukusthā	拘遺河	溪水名鳩対	拘孫河	迦屈蹉河	脚俱多河
22	Hiraññavatī	Hiraññavatī と Kuśinagarī との間	熙連河	醯連溪水辺	熙連禪河	熙連河	金河から拘尸那城への途中
23	Kusinārā Upavattana	Kuśinagarī Upavartana	蘇連双樹の間	塩呵沙	拘尸城	鳩尸那城	拘尸那城

以上は「涅槃經」諸本の遊行ルートを紹介したのであるが、この他に『根本有部律藥事』は明らかに仏入滅を意識した上で、次のような遊行ルートを記している。ヴェーサーリーまでは「涅槃經」に等しいが、後半部分はまったく異なり、ヴィデーハ (Videha) のミティラー (Mithilā) を経由するルートとなっている。ミティラーはガンダク河の左岸 (東) にあった町であるが、現在のネパールのインド国境近くにある Janakpur に比定するのが妥当であろう<sup>2)</sup>。もしそうだとすると、ここはガンダク河からは真東に直線距離で 150km ほどもあり、これは筆者のいう「ケーサリヤ渡河ルート」とも異なるとしなければならない。

『根本有部律藥事』：王舎城 (大正 24 p.019 下) ……波吒離邑の制多処 (p.021 下) ……喬答摩門と喬答摩道 (p.022 中) ……彌伽河 (未生怨が作った橋、栗姑毘が作った橋があった) (p.023 下) …… (仏栗氏国を遊行して) 俱胝聚落 (p.026 中) ……那地迦聚落 = 那維迦聚落 (群氏迦堂) (p.026 中) …… (ここで菴沒羅波利夫人の招待を受ける) (p.026 下) ……広巖城菴羅林 (p.027 中) ……竹林聚落 (p.029 下) ……無間聚落 (p.029 下) …… (勝身城 Videha において遊行して) 弥替羅 (p.030 中) ……阿耨井処 (p.030 中) ……牛苑聚

落 (p.030 下) …… (梵婆城には入らずに) 拘尸那城 (p.031 中)

(1) 「国訳一切経」の註は *Koṭigāma* とする。「律部」26 p.301

(2) 「モノグラフ」の次号に掲載する予定の【論文 26】「原始仏教時代の遊行・通商ルート」にこの根拠を掲載する予定である。

[3] 「涅槃経」諸本の釈尊の滞在地は以上のとおりであるが、本稿では冒頭に掲げたように、特にパータリ村でのガンガー河渡河地点とそこからヴェーサーリーまでの経路、およびヴェーサーリーを去ってクシナーラーまで行く経路に関心があるので、最初にガンガー河渡河地点について細かく検討する。

[3-1] その前にまずパータリ村について考えておこう。パータリ村は後に阿闍世から王位を継いだウダヤバッド (*Udayabhadda*) が王舎城から都をここに遷してマガダ国の首都となったが (1)、『遊行』のみは「巴陵弗城」 (2) とするけれども、『パーリ』が *Pāṭaligāma* (3)、『サンスクリット』が *Pāṭaligrāmaka* (4)、『失訳』が巴連弗邑 (5)、『白法祖』が巴隣聚 (6)、『雑事』が波吒離邑 (7) とするように、釈尊の最晩年にはまだ「村 (*gāma*)」であったようである。*nagara* でもなく *nigama* (8) でもない、単なる *gāma* と呼ばれるに過ぎないところであったわけである。

しかしながら漢訳の経には釈尊の在世中にここはパータリプトラと呼ばれ、すでに鷄林精舎 (*Kukkuṭārāma*) が存在していたとするものがある。しかしそのパーリの対応経を調べてみると、説処は確かに鷄林精舎ではあるが釈尊が登場しなかったり、説処が他の精舎であってしかも釈尊も登場しなかったりする例がほとんどであり、鷄林精舎が説処で釈尊が登場するものは1例もない (9)。

またパーリの経・律にも鷄林精舎に言及するものがあるが、すべて釈尊滅後と明言されているか、経中に釈尊が登場しないので、釈尊がすでに入滅された後の経と推測されるものばかりである (10)。このような経・律は漢訳にもある (11)。

また *MN.094 Ghoṭamukha-s.* はゴータムキー講堂 (*Ghoṭamukhī-upaṭṭhānasālā*) に言及しているが、この経もすでに釈尊が入滅された後であることが明言されている (12)。

以上のようなことを勘案すると、釈尊の最晩年にはパータリ村はまだ村とよばれる状態のところであって、したがって鷄林精舎もまだ建設されていなかったと結論づけることができる。

(1) マガダの王統はピンピサーラから阿闍世、阿闍世からウダヤバッド (ジャイナ教の伝承ではウダーイン) に継承されたことは *Dīpavaṃsa* p.033、*Mahāvāṃsa* p.021、*Samantapāsādikā* (vol. I p.072)、『善見律毘婆沙』 (大正 24 p.687 上)、*Jinakālamālī* p.040 などに記されているが、その首都が誰の時にどのようにして王舎城からパータリプトラに移されたのかは明らかではない。中村元氏は「ウダーインがパータリプトラに首都を建設した」としている。『インド史 I』 (「中村元選集・決定版」第 5 巻) p.399 なおこれらはピンピサーラは 52 年、阿闍世は 32 年、ウダヤバッドは 16 年統治したとする。

(2) 大正 01 p.12 上

(3) 大正 01 p.84

(4) 大正 01 p.136

(5) 大正 01 p.177 中

- (6) 大正 01 p.162 上  
(7) 大正 24 p.384 中  
(8) nagara は「都市」、nigama は「町」に相当する。【論文 15】「パーリ仏典に見る janapada と raṭṭha」（「モノグラフ」第 13 号 2008 年 3 月）参照  
(9) 漢訳経が仏在処をパータリプトラの鶏林園とする経は以下のもので、そのパーリの対応経とその説処などは次のとおりである。  
『雑阿含』248（大正 02 p.059 中）=SN.035-193：説処はコーサンビー・ゴーシタ園であって、釈尊は登場しない  
『雑阿含』559（大正 02 p.146 中）=SN.035-192：説処はコーサンビー・ゴーシタ園であって、釈尊は登場しない  
『雑阿含』628（大正 02 p.175 中）～636（大正 02 p.176 上）=SN.047-003：仏在処は舎衛城であって、釈尊が登場する。  
=SN.047-017：説処は舎衛城であって、釈尊が登場するかしらないかは不明  
=SN.047-021：説処は鶏林精舎であるが、釈尊は登場しない、  
=SN.047-023：説処は鶏林精舎であるが、釈尊は登場しない、  
=SN.047-024：説処は舎衛城であって、釈尊は登場しない  
『雑阿含』719（大正 02 p.193 中）=SN.046-008：説処はコーサンビー・ゴーシタ園であって、釈尊は登場しない  
(10) 例えば次のようなものである。  
MN.052 *Aṭṭhakanāgara-s.* (vol. I p.349)、SN.045-018 (vol. V p.015)、SN.045-019 (vol. V p.016)、SN.045-020 (vol. V p.016)、SN.047-021 (vol. V p.171)、SN.047-022 (vol. V p.172)、SN.047-023 (vol. V p.173)、AN.005-005-050 (vol. III p.057)、AN.011-002-017 (vol. V p.342)、Vinaya「衣毳度」(vol. I p.299)  
(11) 例えば次のようなものである。  
『中阿含』217「八城経」（大正 01 p.802 上）、『仏説十支居士八城人経』（大正 01 p.916 上）、『十誦律』「衣法」（大正 23 p.201 上）  
(12) vol. II p.157

[3-2] しかしながらその時ここには、コーサラとともに当時のインドを二分するマガダという大国が、おそらく国の総力を投入して対岸のヴァッジ国との戦争を想定した城を築いていた。まさしく大都市として発展するための土台作りが行われていたのである。それではその城の規模はどれくらいのものであったのであろうか。

パトナ博物館の学芸員の話<sup>(1)</sup>によれば、アショーカ王時代の城は東西が約 20km であり、それ以前に阿闍世王が築き、その息子のウダヤバッド王が住んだパータリプトラ城はアショーカ王時代の約半分であったという。しかしパータリプトラ城の王宮址とされる Kumhrar 遺跡のところにあつた立て看板の説明‘Ancient Pataliputra’には、メガステネースの記述によれば、東西はガンガー河に沿って 14km、南北は 3km、周囲は 36km であつたとする<sup>(2)</sup>。また『西域記』には波吒釐子城の周囲は 70 余里としている<sup>(3)</sup>。玄奘時代の 1 里は 400～440m であるとされるから<sup>(4)</sup>、試みに 72 里×420m で計算してみると約 30km ほどになる。

この学芸員の説明によれば、アショーカ王時代のパータリプトラ城の東門は Gulzarbagh のところであつたということで、地図を調べると今のマハトマガンジー橋の少し東のところにあたる。Kumhrar 遺跡はこの橋の少し西側のところであるから、古いパータリプトラはアショーカ時代のパータリプトラの東半分であつたのであろう。西門は Deghvara のとこ

ろであるというが、この場所は地図を調べてもよくわからない。地図上で Gulzarbagh を起点にして西に 20km を計ってみると、今の町をずいぶん外れてしまうから、20km は正しくないのではなかろうか。しかしメガステネースの 14km を採用しても町を外れる。あるいは東の境界は Gulzarbagh よりももっと東であったのであろうか。現在のパトナの市街はガンガー河の南岸沿いに東西 12km、南北 3km ほどであるから、今のパトナ市街を古のパーティリプトラと重ねて考えてよいのかも知れない<sup>(5)</sup>。

- (1) 2011 年の調査。残念ながら氏名は記し忘れた。
- (2) なおカウティリヤの『実利論』にも記述があるということであったので調べてみた。しかし「王宮に関する規定」(岩波文庫判 上巻 p.082) や「城塞都市の建設」に関する規定(同 p.101) はあるが、実際のパーティリプトラの都市構造についての記述はないようである。
- (3) 平凡社「中国古典文学大系 22」p.242
- (4) 上記『大唐西域記』p.416
- (5) 『ブッダの世界』は「現在のビハール州の首都パトナ市は、パーティリプトラの遺跡を覆う形でガンガー河南岸の東西に長くのびている」としている。いっぽう続けて「現パトナ市の東の部分から、マウリヤ時代の円柱のある大宮殿あとが出土しており、上流に面した西の部分は、昔、ソーン河の河底にあったと見られているから、釈尊の時代のパーティリ村も下流によった部分にあったものと推定される」としている(p.190)。先の文章と辻褃が合わない。  
なおおそらく『実利論』をもとにしたものと考えられるが(文庫本・上 pp.97~104 参照)、「道—古代エジプトから現代まで—」鈴木敏 技報堂出版(1998 年 4 月)の p.30 に仏教成立以前の都市の構造を法典によるとして次のように記している。「三重の掘割をめぐらし、城壘を築き、その上に楼塔と楼門を作り、ここから城内に道を設ける。東西南北に各々 3 つ、計 12 の城門をつくり、それぞれを結ぶ王道を東西と南北に 3 本ずつ設ける。都心から北に王宮をつくり、方位によって分けられた各地区に官庁、倉庫、市場などを設ける」などとしている。

[3-3] ところでヴェーサーリーの記述から経が始まる『法顕』は別にして、他のすべての「涅槃経」は釈尊のガンガー河渡河地点を「ゴータマの渡し」としている。『パーリ』は、その時マガダの大臣スニーダとヴァッサカーラは世尊の後についていった。そして「今日、沙門ゴータマが出て行くであろう門をゴータマ門と名づけ、またガンガー河を渡るであろう渡し場をゴータマの渡しと名づけよう」としているから<sup>(1)</sup>、その門や渡し場はこの時作られたのではなく、すでにあったところに名前がつけられたことになる。『失訳』<sup>(2)</sup>も『遊行』<sup>(3)</sup>も『白法祖』<sup>(4)</sup>もしかりである。しかし『サンスクリット』<sup>(5)</sup>と『雑事』<sup>(6)</sup>は名づけた後、改めて門と渡しを建設した(māpayati)としているが、門と渡し場がすでにあったことは他と異なる。

これらの記事を総合的に理解してみると、確かに釈尊はこのときに「ゴータマの渡し」と名づけられた渡しからガンガー河を渡河したのであるが、しかしその時点ではその渡し場は当時の主要な交通路としての渡しとして使われていたのではなかったように思われる。『サンスクリット』と『雑事』はこの後に渡し場が建設されたというし、『パーリ』は「そのときガンガー河には水が満ち、水が岸边まできていて鳥も水が飲めるほどであった(Gaṅgā nadī pūrā hoti samatittikā kākaṭṭhā)。向こう岸に渡るためにある人々は舟(nāvā)を求め、ある人々は木の筏(uḷumpa)を求め、ある人々は竹の筏(kulla)を求めていた」と

する。これはこの渡しがまだ交通の要衝としての渡し場として整備されていなかったことを物語るであろう。まだ栈橋のようなものが整備されていなかったがゆえに、水が岸辺まで来ていて鳥が水を飲めるほどであったのであり、また渡し舟なども準備されていなかったので人々は渡河手段を求めたのであろうからである<sup>(7)</sup>。

またもう一つの「ゴータマ門」についていえば、この後すぐにマガダの首都となったとはいえ、パータリ村はこの時点ではまだ村に過ぎず、城もまだ建設中であって、したがっておそらく門もまだしっかりとほどこき上がっていなかったのであろう。このようにまだしっかりとほどこき上がっていなかった門に繋がる渡しもまた整備されていなかったものと考えられる。

なおこの時釈尊がパータリ村で止宿した場所を、「涅槃經」の諸本はそれぞれ、

『パーリ』：われわれの休息所 (no āvasathāgara)。(DN. vol.II p.84)

『サンスクリット』：われわれの休息所 (asmākaṃ āvasatha)。(p.144)

『失訳』：阿衛聚の一樹下。(大正01 p.177下)

『白法祖』：阿衛聚の一樹下。(大正01 p.162下)

『遊行』：尋いで如来のために大堂舎を起し、処所を平治し、掃灑焼香して、巖かに宝座を敷き、供設既弁した講堂。(大正01 p.12中)

『雑事』：閑静房舎。(大正24 p.384下)

としている。『遊行』はこの時釈尊のために大堂舎が建設されたというが、それはありえないことであって、他の諸本が「休息所」「樹下」などとするように、この村には釈尊教団のための僧院がまだ建設されていなかったことを物語る。

なぜこのようなことにこだわるかといえ、釈尊当時のマガダ国とヴァッジ国を結ぶ幹線道路はどこでガンガー河を渡っていたかということに興味があるからである。そして以上のことを勘案すると、その幹線道路はここを通っていなかったという印象を受ける。もしここがその幹線道路の渡し場であったのなら、パータリ村は「村」ではなく少なくとも nigama にはなっていたであろうし、nagara と表現されても違和感はなかったはずであるからである<sup>(8)</sup>。

しかし現在次号の「モノグラフ」に掲載するつもりで「釈尊時代の遊行・通商ルート」という論文を執筆中であるが、原始仏教聖典の記述による限り、マガダ国とヴァッジ国を結ぶ道路はこの他には存在しなかったようである。また王舎城とヴェーサーリーを直線的に結んでみても、パータリ村を経由するこのルートが一番それに近い。もしこれ以外に王舎城とヴェーサーリーを結ぶ道路がなかったとすれば、パータリ村がガンガー河の渡河地点としてもっと発展していてよかつたはずであるが、そうではないと考えられるのでこの辺が腑に落ちない。前述の論文を執筆する時に、もう少しよく検討してみるつもりである。

(1) DN. vol.II p.089

(2) 大正01 p.178上

(3) 大正01 p.012下

(4) 大正01 p.163上

(5) p.156

(6) 大正24 p.385中

(7) 次項で取り上げる現在のパトナのブッダガート (Buddha ghat) は下の写真のように階段が作られている。しかしここより少し下流にあるマヘンドラガート (Mahendra ghat) は

現在、中洲への舟が発着する渡し場として使われているが、しかしここには渡し場としての施設はない。おそらく当時の「ゴータマの渡し」はこのような状態であったのではなかろうか。



ブッダガート



マヘンドラガート

- (8) *gāma*, *nigama*, *nagara* の違いについては、「モノグラフ」第13号に掲載した【論文15】「パーリ仏典に見る *janapada* と *raṭṭha*」を参照されたい。

[3-3] ところでこの「ゴータマの渡し」は現在のブッダガート (*Buddha ghat*) に比定されている。このガートは国立パトナ博物館の近くにあつて、博物館の前のこのガートに通ずる通りは「*Buddhamarg* (ブッダ通り)」と名づけられている。そしてこの辺りが現在のパトナ市街の西端に相当する<sup>(1)</sup>。

そして [3-2] に書いたように、古代のパータリプトラ城は現在のパトナ市街に重なるとすれば、阿闍世王が建設していたパータリプトラ城の西の境は今のパトナ博物館のある辺りであったということになる。すなわち「ブッダマールガ」のところである。「涅槃経」にはその時釈尊が出られた門を「ゴータマ門」と名づけ、釈尊がガンガー河を渡られたところを「ゴータマの渡し」と名づけたというが、博物館のところ辺りに西門が建設中で、これが「ゴータマ門」と名づけられ、博物館から少し北に行ったブッダガート辺りに後にきちんとした渡し場が建設されて、これが「ゴータマの渡し」と名づけられたのではなかろうか。このように考えると、「ブッダガート」を「涅槃経」の「ゴータマの渡し」に比定するのは蓋然性があると考えられる。

ところであくまでも現在の話であるが、このブッダガートの辺りは次項に示す地図のように乾期においてはずっと砂浜になっている。したがってガートの辺りには水はない。われわれは「涅槃経」における釈尊はその年の雨安居を王舎城で過ごされ、迦絺那衣の期間も終わったあとにヴァッサカーラや比丘らに不退法を説かれたあと、パータリ村に向けて出発されたと考えている。したがってガンガー河を渡る時には乾期になっており、当時の「ゴータマの渡し」が現在の「ブッダガート」であつて、ガンガー河の状態も現在と同様であつたとするなら、水はすっかり引いているはずであつた。もしそうなら「ゴータマの渡し」は砂浜の先の、川幅が狭くなっているところに設けられたということになる。しかし「そのときガンガー河には水が満ち、水が岸辺までできていて鳥も水が飲めるほどであつた」とわざわざ記述されるのは異常事態であつたのであろう。

- (1) 次項に掲げる博物館周辺のパトナ地図を参照されたい。

[3-4] それではこの「ゴータマの渡し」とガンダク河との関係はどうであろうか。あくまでも現在のことであるが、Google Map で ‘Patnamuseum, Patna, Bihar, India’ を検索してみるとよく解るが、ここは明らかにガンダク河の合流地点よりも上流であり、ここを渡

河した対岸はガンダク河の右岸の Sabarpur である（ガンダク河の左岸のところは Hajipur）。



パトナ博物館付近のガンガー河 右上から流れ込んでいるのがガンダク河（Google Map）

3年前（2011年2月）に筆者はこの Buddhaghat よりも少し下流にある Mahendra ghat から舟に乗ってガンガー河中流に漕ぎ出してみたが、その時に見た地理関係はこの地図の通りである。

このように現在のブッダガートが釈尊時代の「ゴータマの渡し」であり、ガンダク河もその時代から流れが変わっていないとすると、「ゴータマの渡し」はガンダク河がガンガーに合流する地点より上流にあったことは確実である。以前に乾期（11月）のインドの河川の流れの速さを計ってみたことがある。目測であって見当にすぎないが、ガンガー河やヤムナー河、ガーグラ、ソン河などの水の流れの速さはだいたい時速2kmかせいぜい2.5kmであって非常にゆるやかであるが、ガンダク河はヒマラヤからガンガー河までの距離が比較的短いからであろうか、若干早い。したがってこの流れの早さと水量を避け、しかもガンガー河はこの合流地点よりも下流ではとてつもない大河になるから、パータリ村のガンガー河の渡しはこの河がガンガー河へ合流する地点よりも上流の方に設けられていたということもよく理解できる。

[4] 以上のように、釈尊はパータリ村の「ゴータマの渡し」と名づけられた渡しからガンガー河を渡られたが、到達した向こう岸の地点はガンダク河の右岸（西側）であった。今の Sabarpur という町である。そしてもしそうだとすると、ヴェーサーリーはガンダク河の左岸（東側）にあるから、釈尊がヴェーサーリーに行く時にはもう一度この河を渡らなければならない。もし「ゴータマの渡し」でガンガー河を渡り、その直後にまたガンダク河を渡るとなれば二度手間になり、わざわざガンダク河を避けて、その合流地点よりも上流で渡る意味はないことになる。したがって釈尊はそのままガンダク河の右岸を上流に向かって進ま

れ、ヴェーサーリーの近くでガンダク河を渡られたのではないであろうか。筆者のいう「ガンダク河右岸北上ルート」をとられたということになる。

しかしこれではどこかでガンダク河を渡ってヴェーサーリーに行かなければならないことになるが、それではそのガンダク河の渡河地点はどこであったのであろうか。

[4-1] そこで注目されるのが、『失訳』と『白法祖』の遊行記事である。先に作成した各「遊行経」の行程対照表を見ていただければ一目瞭然であるが、これら2つの文献は、ヴェーサーリーに入る時にも、ヴェーサーリーから出る時にも同じ地点を通ったとしている。『失訳』のいう拘利邑、『白法祖』のいう拘隣聚である。なお『サンスクリット』ではヴェーサーリーに入る前の村を *Kuṭigrāma* とし、ヴェーサーリーから出た後の村を *Kuṣṭhagrāma* とするから別の村ということになるが、『失訳』と『白法祖』がこれを混同して同じ訳語を与えたということはないであろう。むしろ『サンスクリット』の方が、同じ地名を別表記したとも考えられないこともない。インドではこのようなことは現在でもしばしばあることであるからである。そして『パーリ』ではこれらはコーティ村 (*Koṭigāma*) に相当する。

そしてもし『失訳』と『白法祖』の記述を信じるとすれば、釈尊はガンガー河方面からヴェーサーリーに入る時にも、クシナーラー方面に向けてヴェーサーリーから出る時にも同じ村を通ったとするのであるから、『失訳』のいう拘利邑、『白法祖』のいう拘隣聚、すなわち『パーリ』のいうコーティ村はガンダク河をはさんでヴェーサーリーの対岸にあったのでなければならぬ。クシナーラーはヴェーサーリーから見て北西方面にあり、したがってヴェーサーリーを出る時には南東方面に進まれるはずはないから、この拘利邑＝拘隣聚はヴェーサーリーの北西ないしは、西方になければならぬ。一方ガンダク河の右岸を北上して、ヴェーサーリーに入る時にもここを通ったとしたなら、拘利邑＝拘隣聚はヴェーサーリーの西方になければならぬ。そしてそういう地点は、ガンダク河をはさんでヴェーサーリーの対岸しか考えられない。

ただしヴェーサーリーに入る時には『失訳』はコーティ村の後に喜予邑の河水辺の捷祇樹下に止まったとし<sup>(1)</sup>、『白法祖』も喜予国捷提樹下に立ち寄ったとする<sup>(2)</sup>。この喜予邑は『パーリ』のナーディカ村 (*Nādikā*) の煉瓦堂、『サンスクリット』のナーディカー村 (*Nādikā*)、『遊行』の那陀村、『雑事』の販葦聚落村<sup>(3)</sup>に相当する。『失訳』が喜予邑の河水辺の捷祇樹下とし、また『雑事』が「販葦聚落村」とするのは、ここが川べりにあったことを意味するであろうから、ナーディカこそがガンダク河の右岸にあったまさに渡河点であったのであろう。

(1) 大正01 p.178 中

(2) 大正01 p.163 上

(3) 『雑事』が *Nādikā* を「販葦聚落村」と訳するのは、*Nādikā* が「葦」を意味する *naḍa*、*naḷa* からきた語であると解釈したのかも知れない。とするならば *Nādikā* という地名そのものが葦と関係があったかも知れない。

[4-2] ところで「涅槃経」では、釈尊がヴェーサーリーの町に入られるよりも前に、アンバパーリーの食事の招待を受けたことになっているが、「涅槃経」諸本はアンバパーリーが釈尊を招待する場面を次のように記している。

『パーリ』：アンバパーリーは世尊がヴェーサーリーに来られており、自分のアンバ林に

住しておられることを聞いた。そこで自分の園に赴き、自分の家での明日の食事を招待した。(DN, vol. II p.095)

『サンスクリット』：ヴァイシャーリーに着き、アームラパーリーの林に止宿。アームラパーリーが訪ねて彼女の家での明日の食事を招待した。(p.225)

『失訳』：城外の姪女奈氏の園に止宿。奈女はそこを訪ねて舎での食事を招待した。(大正01 p.178下)

『白法祖』：世尊は維耶梨国に未至七里の椽園に止まる。そこを姪女が訪ね家での明日の食事を招待した。(大正01 p.163中)

『遊行』：毘舍離に来て1樹下に坐されたことを聞いて、菴婆婆梨が訪ねて止宿と食事を招待。世尊は女の園に止宿。(大正01 p.013中)

『雑事』：世尊は広巖城の菴没羅林に止宿。菴没羅女が訪ねて、翌朝の宅での食事を招待した。(大正24 p.385下)

このように「涅槃経」では、アンバパーリーが翌日の自分の家での食事を招待する場所は、すべてアンバパーリ園ということになっている（『遊行』は毘舍離に来て1樹下とする）。しかし「涅槃経」をイメージしていると考えられる『パーリ律』の「葉鞞度」は、王舎城からパータリ村に行き、ゴータマ門とゴータマの渡しの因縁譚を記し、その後に Kotigāma に行くところまでは同じであるが<sup>(1)</sup>、その後は「涅槃経」とは異なる。遊女アンバパーリーはコーティ村に釈尊が来られたことを聞いて、ヴェーサーリーからコーティ村まで会いに行き、明朝の食事を招待して承諾されたことになっており、またヴェーサーリーのリッチャヴィ族たちも釈尊がコーティ村に来られたことを聞いて会いに行く途中アンバパーリーに会い、食事の招待の権利を譲ることを要求したことになる<sup>(2)</sup>。したがって「葉鞞度」ではアンバパーリーが釈尊に翌朝の食事を招待した場所はコーティ村であったことになる。そして釈尊はその足でコーティ村からナーディカに行つて煉瓦堂 (Giṇjakāvasatha) に止宿され、翌朝アンバパーリ園で食事を供養されたときに、アンバ園が仏を上首とするサンガに寄進された、としている<sup>(3)</sup>。

また『根本有部律葉事』では、世尊が那地迦聚落＝那雉迦聚落（群氏迦堂）に来られたことを聞いて、菴没羅波利夫人は一羽のオウムを使わせて仏を菴没羅園に招待し<sup>(4)</sup>、広巖城中の菴没羅園に釈尊が到着されたことを知った菴没羅波利夫人は世尊を訪ねて翌日の食事を招待したことになっている<sup>(5)</sup>から、アンバパーリーが世尊のヴェーサーリーに来られたことを知ったのは、コーティ村ではなくナーディカであったとしている。アンバパーリ園であったとする「涅槃経」とは異なっているわけである。

このように釈尊がヴェーサーリーに入られる直前の記事は、「涅槃経」と『パーリ』と『根本有部律』の「葉鞞度」では異なるのであるが、ここには釈尊の遊行経路を考察するためにはゆるがせにできない情報が含まれているように考えられる。すなわち『パーリ律』「葉鞞度」の記事からすると、コーティ村で翌朝の食事の招待を受けた釈尊はその足でナーディカまで行ってそこに止宿し、その翌朝にヴェーサーリーのアンバパーリーの家で食事を供養されたというのであるから、コーティ村とナーディカとヴェーサーリーはごく近い距離にあったのでなければならぬことになるからである。

(1) Vinaya vol. I p.230

- (2) p.231
- (3) p.232
- (4) 大正 24 p.026 下
- (5) 大正 24 p.028 中

[4-3] これらの記述の中で気になるのはコーティは *Koṭigāma* すなわちコーティ「村」と表されるのに、ナーディカ (*Nādika*, *Nātika*, *Ñātikā*. Skt. では *Nādikā*) は ‘*gāma*’ 「村」とは表されないことである。そこでパーリのナーディカを仏在処ないしは説処にする経を調べてみるとすべては ‘*Nādiḱe viharati Giṅjakāvasathe*’ という文章であって、ナーディカ「村」とされることはない。念のためにその資料をあげておく。

- DN.018 Janavasabha-s.* (闍尼沙經 vol.II p.200)
- MN.031 Cūlagosīṅga-s.* (牛角林小經 vol.I p.205)
- SN.012-045* (vol.II p.074)
- SN.014-013* (vol.II p.153)
- SN.035-113* (vol.IV p.090)
- SN.055-008* (vol.V p.356)
- SN.055-009* (vol.V p.358)
- SN.055-010* (vol.V p.358)
- SN.044-011* (vol.IV p.401)
- AN.006-002-019* (vol.III p.303)
- AN.006-002-020* (vol.III p.306)
- AN.006-006-059* (vol.III p.391)
- AN.008-008-073* (vol.IV p.316)
- AN.008-008-074* (vol.IV p.320)

なお仏在処が明言されていないが前経との関係や経の内容から、次のものもナーディカの煉瓦堂を仏在処とする経と解釈してよいものと考えられる。

- SN.035-114* (vol.IV p.091)
- SN.055-009* (vol.V p.358)
- SN.055-010* (vol.V p.358)
- AN.008-008-075* (vol.IV p.322) ~ *085* (vol.IV p.339)
- AN.011-001-010* (vol.V p.322)

このようにパーリにおいては、ナーディカは「村」と表現されることはないのであるが、漢訳については聚落、城、国などとするものがある。

聚落とするもの

- 『雜阿含』 301 (大正 02 p.085 下) : 那梨聚落深林中の待賓舍
- 『雜阿含』 854 (大正 02 p.217 中) : 那梨迦聚落の繁耆迦精舍
- 『雜阿含』 926 (大正 02 p.235 下) : 那梨聚落の深谷精舍
- 『雜阿含』 1037 (大正 02 p.270 下) : 那梨聚落の曲谷精舍
- 根本有部律「雜事」 (大正 24 p.350 中) : 販葦聚落
- 五分律「臥具法」 (大正 22 p.168 中) : 那羅聚落 (1)

僧祇律「雜誦跋渠法」(大正22 p.444下)：波羅奈林聚落  
城とするもの

『別訳雜阿含』193(大正02 p.444上)：那提城の群寔迦所住の処

『別訳雜阿含』194(大正02 p.444中)：那提城の群寔迦所住の処

『仏説人仙經』(大正01 p.213下)：那提迦城の嶺左迦精舎

国とするもの

『別訳雜阿含』151(大正02 p.430下)：那提迦国の瓮寔迦精舎

しかし漢訳は慣例的にこのように訳したのみであって、筆者が問題にしているような事柄が自覚されていないからであろう。

もっとも『長阿含』004「闍尼沙經」(大正01 p.034中)は「那提迦の捷稚住処」、『中阿含』116「瞿曇弥經」(大正01 p.605上)は「那摩提(Nādika)の捷尼精舎」、『中阿含』185「牛角婆羅林經」卷下(大正01 p.729中)は「那摩提瘦の捷祁精舎」、『四分律』「房舎捷度」(大正22 p.943上)は「那梨の林」、『瞿曇弥記果經』(大正01 p.856上)は「那婆提耆尼舎」とし、これらはパーリの表現を継承しているものと考えられる。

前項に述べたようなナーディカとコーティ村の位置関係や、その表記の仕方を勘案すると、ナーディカは村とか町ではなく、むしろコーティ村のなかの1地域を指すものと考えてよいのではなかろうか。そしてそこに「煉瓦堂」などとよばれる建造物があったのである。このように考えると、ナーディカの煉瓦堂はコーティ村のなかの1地点を表すことになる<sup>(2)</sup>。

(1) 那羅聚落がナーディカをさすものかよくわからないが、次の僧祇律「雜誦跋渠法」と内容が合致し、これは「跋耆国(Vajji)を遊行して、漸漸に波羅奈林聚落へ至った」としているもので、とりあえずナーディカであると理解しておいた。

(2) 『ブッダの世界』p.190は、「ナーディカー村の煉瓦堂」とし、「ヴェイシャーリーの南約25kmのガンダキ河畔の小村ゴタローに、ストゥーバ址のごとき煉瓦の堆積したマウンドがあるが、これがナーディカー村の煉瓦堂の址ではないかという人たちもいる」と記している。しかしヴェーサーリーとコーティ村、ナーディカの位置関係からすると、このような見方はできない。

[4-4] またもう一つ注意しなければならないことは、上記からも知られるようにナーディカの煉瓦堂を仏在処・説処とする経はかなりの多数に上ることである。この中には「涅槃經」のように死後の記別に関するものもあるがその内容は雑多であり、中でも注目されるものは例えば『中阿含』116「瞿曇弥經」や慧簡訳『瞿曇弥記果經』、『根本有部律』「雜事」、それに仏伝經典ではあるが『中本起經』<sup>(1)</sup>などのように、マハーパジャーパティー・ゴータミーにちなんで女性の出家が許されたことを内容とするものである。同じ因縁をAN.008-006-051<sup>(2)</sup>やVinaya「比丘尼捷度」<sup>(3)</sup>、AN.-A.<sup>(4)</sup>、Jātaka 281 *Abbhantara-j.*<sup>(5)</sup>などは単にヴェーサーリーとするのであるが、これも実はナーディカであったと考えてよいかも知れない。

このようにもしマハーパジャーパティー・ゴータミーにちなんで女性の出家が許されたのがここであったとすると<sup>(6)</sup>、われわれはこれは釈尊58歳の後期のことであったと考えているので<sup>(7)</sup>、釈尊は少なくとも「涅槃經」の時とは別に、ここに来られたことがあるということになる。なおこの時はカピラヴァットゥからここに来られたことになっているので「涅槃經」とは逆ルートであり、これは次節に考察することになるヴェーサーリーとクシナーラー

を結ぶルートに関係し、これは筆者のいう「ガンダク河渡河ルート」を指し示すことになる。

- (1) 大正 04 p.158 上
- (2) vol.IV p.274
- (3) vol. II p.253
- (4) vol. I p.337
- (5) vol. II p.392
- (6) ただし『四分律』「比丘尼毘度」（大正 22 p.922 下）、『五分律』「比丘尼法」（大正 22 p.185 中）は舎衛城の祇園精舎であるとする。【論文 10】「モノグラフ」第 10 号に掲載した【論文 10】「Mahāpajāpatī Gotamī の生涯と比丘尼サンガの形成」p.31 以下参照。
- (7) 上記【論文 10】参照

[4-5] 以上のようにナーディカを仏在処とする経が多数存在するという事は、釈尊はしばしばこの地を訪問されたということを示しているわけであって、そうするとナーディカすなわちコーティ村を経由するヴェーサーリーとクシナーラー、舎衛城方面を結ぶ「ガンダク河渡河ルート」は幹線道路であったといえるであろう。なおコーティ村自体はそれほどたくさんの経の舞台となっているわけではないから、原始仏教聖典の中ではコーティ村よりはナーディカの煉瓦堂の方が主役であるといえることができる。そして先に推定したように、ナーディカはコーティ村の一地区だとすると、ナーディカはコーティ村の中心地区であって、ここが中心となっていたのはここに渡し場があったからであろう。

このように考えると、コーティ村はヴェーサーリーからガンダク河を渡ってクシナーラーに行く道と、ガンガー河を渡ってガンダクの右岸を北西方面にのぼってパーヴァーに行く道との交差点にあったのであろう。現在は Muzaffarpur 県の Muzaffarpur と Saran 県の Chhapura を結ぶ国道 102 号線があってガンダク河には立派な橋が架けられている。おそらくこの橋のヴェーサーリー側からすると渡り切った辺りにコーティ村のナーディカの渡しがあったのであり、釈尊はパータリ村からガンガー河を渡って北上してからヴェーサーリーに入られる時にも、そして竹林村で雨安居を過ごされてから、3 ヶ月後に入滅することを宣言された後、ヴェーサーリーを出てクシナーラーに赴かれる時にも、ここを通られたのである。

[4-6] 以上のように筆者はパータリ村でガンガー河を渡ってヴェーサーリーまで行くルートは、「ガンダク河左岸北上ルート」ではなく、「ガンダク河右岸北上ルート」であったと考えるのであるが、それを補強するもう一つの理由は、釈尊がヴェーサーリーの町に入られるよりも前に、アンバパーリ園に立ち寄られているということである。先に紹介したように、「涅槃経」におけるアンバパーリーが食事を招待した時の状況は、釈尊がアンバパーリ園に到着されたことをアンバパーリーが聞いて、園に行ったことになっている。ヴァッジ族の人々もまた同様である。ところがもし釈尊が先に市街を通られたとするなら、ヴァッジ族の人々はアンバパーリーよりも先に釈尊に出会っているはずである。しかるに釈尊がアンバパーリ園に到着されたことを彼らが知らなかったということは、釈尊が市街を通らなかったという何よりの証拠となる。

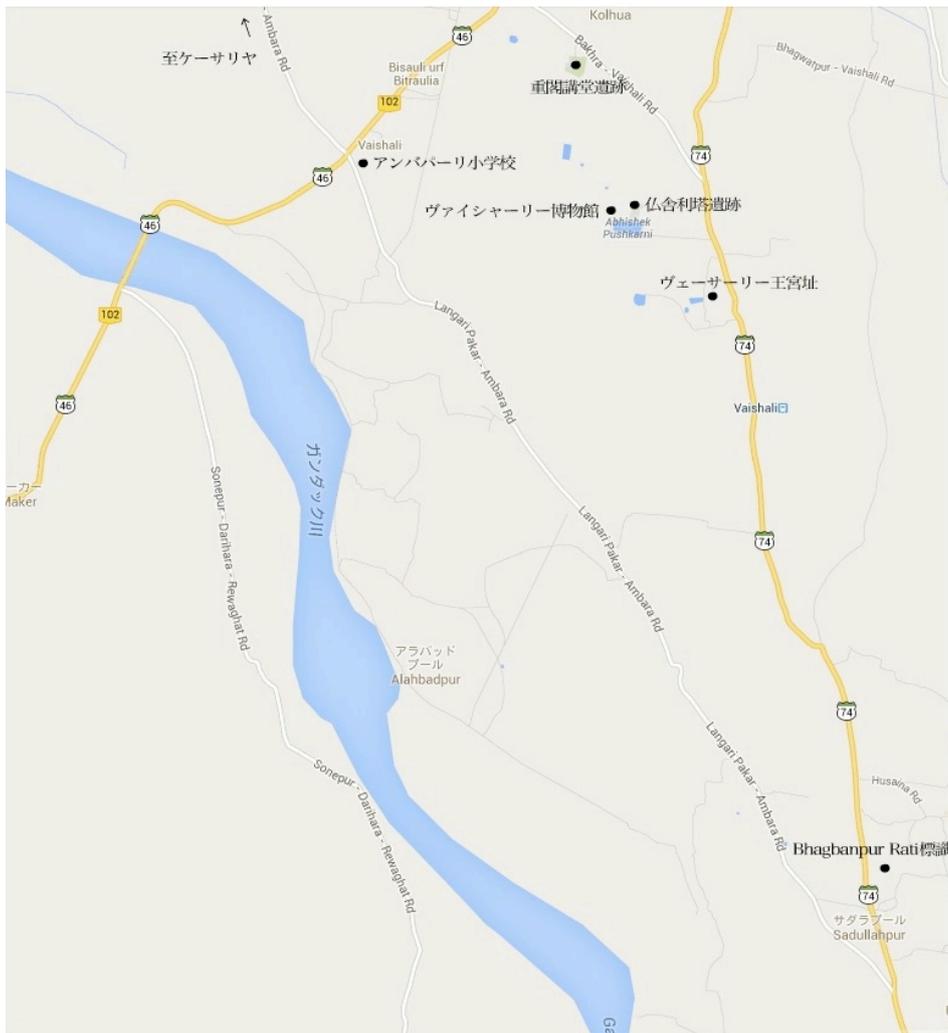
ところでこのアンバパーリ園のあったところは、今のアンバラ村に比定されており、この村はヴェーサーリーの市街の西北にあって、筆者が考えるように釈尊が「ガンダク河右岸北上ルート」をとってヴェーサーリーに入られたとすると、アンバパーリ園は先ほど書いた現在ガンダク河に架けられている橋から直線距離で 3.5km ほど東に行ったところにあるから、

ヴェーサーリーの市街に入るよりも前にアンバパーリ園に着くことになる。

しかしながら釈尊が「ガンダク河左岸北上ルート」をとってヴェーサーリーに入られたとすると、アンバパーリ園に行くためには必ずヴェーサーリーの市街を通らなければならないから、先のような状況は起こらない。

また釈尊はこの年の雨安居を竹林村で過ごされたとされているが、地元ではこの竹林村は重閣講堂からさらに南に直線で14kmほどのところにある **Bhagbanpur Rati** に比定されている<sup>(1)</sup>。すなわち釈尊はアンバパーリ園からヴェーサーリーの町中を通して、さらに南下して竹林村に到着されたのであり、ヴェーサーリーから出る時には、竹林村を出発してヴェーサーリーの市街で托鉢され、その足でクシナーラーの方に向かわれたのである。このようなアンバパーリ園、ヴェーサーリー市街、竹林村の地理的関係を考えても、筆者の主張する「ガンダク河右岸北上ルート」を採用せざるをえないことになる。

なお前述したように、ガンダクの渡し場があったところはコーティ村のナーディカであった。このナーディカから渡し舟に乗ってヴェーサーリーの町に着くのがその西北のアンバパーリ園のところであったとすると、ナーディカはガンダクを挟んでヴェーサーリーの真向いにあったのではなく、少し上流にあったのかも知れない。



現在のヴァイシャリー地図（Google Map をもとに研究会で作成したもの）

- (1) 次項で紹介する Jagdishwar Pandey 氏は、この村を Nātika に比定している。氏のいう Nātika は釈尊がコーティ村の次に住された Nādika をさす。p.30 しかしここはガンダク河岸ではなく内陸部にあるから、『失訳』が河水辺とし、『雑事』が「販葦聚落村」とする地形とは相応しない。また現在この付近には方々に竹林が見られる。

[4-7] しかしながら釈尊時代の仏蹟の場所をかなり細かく検証した K.P.Jayaswal Research Institute の Assistant Director である Dr.Jagdishwar Pandey という方の 1996 年に出版された “On the Footprints of the Buddha, Identification of Controversial and Unknown Places” のなかでは、コーティ村は Hajipur-Mahnar Road 中にある Kaṭahariyā ではないかと推定している (1)。現時点では筆者は Mahnar と Kaṭahariyā が地図上でどのあたりにあるのか確認していないが、Hajipur はガンガー河をはさんだパトナの対岸にある町であって、Mahatma Gandhi 橋を渡ったところにある町であるから、これはガンダク河の左岸であり、巻末に付された地図でも「ガンダク河左岸北上ルート」を描いている。

またこの書物ではナーディカを現在の Bhagwanpur Ratti に比定している (2)。もしこれが現地表記の Bhagbanpur Rati に相当するとすれば、ここは竹林村に比定されるべきことは前述した。

(1) p.046

(2) p.030

[5] 次に 3 ヶ月後に入滅することを宣言された後に、釈尊がヴェーサーリーを出てクシナーラーに行かれたルートを検討する。

前項に記した “On the Footprints of the Buddha, Identification of Controversial and Unknown Places” は、その巻末に「涅槃経」の遊行ルート略地図を付しており、これはヴェーサーリーのところでガンダク河を渡らないで、ガンダク左岸を北西に上ってケーサリヤ (Kesariya) のところで左折してガンダクを渡ることになっているから、この著者は「ケーサリヤ渡河ルート」説をとっていることになる。しかし筆者は前項に記したとおり、ヴェーサーリーに入られる時にも、ヴェーサーリーを出られる時にもともにコーティ村を通られたと考えているのであるから、筆者の考えは「ガンダク河渡河ルート」となることはいうまでもない。

[5-1] ところでこの著者が考える渡河地点であるケーサリヤはヴェーサーリーの重閣講堂址から北西に直線距離にして 45km (1) ほど離れたガンダク河の東側 (左岸) にある、いまインドの考古局がインドで最大の、ポロブドゥールにも匹敵する仏塔として売り出そうとしているところである。確かに大きな仏塔で、現在発掘すると同時に修復しており、私が訪れた 2001 年にはまだ仏塔の右半分には土がかぶったままであった。しかしポロブドゥールに匹敵するというのは大袈裟で、ポロブドゥールとは遺跡の規模も質も雲泥の差があるといわざるをえない。ポロブドゥールもそれほど古い遺跡ではないが、この遺跡もそれほど古くはなく、パトナ博物館の考古学者のいうところによれば古くてもせいぜい 6 世紀のものであるということであった。インドの考古学者は『大唐西域記』 (2) が、「ヴェーサーリーの大城から西北へ五、六十里行ったところに大ストゥーパがある。リッチャヴィ子が如来の後を追ってきたので、大河を化現されて渡ってこられないようにされた。如来は形見として鉢を残した」というその場所であるとする。玄奘時代の 1 里は 400~440m ということである

から、55里×420mで計算してみると約23kmほどになる。Kesariyaは先述したようにヴェーサーリーから45kmほど離れているから距離は合わないが方角は一致する。もしこれが史実を表しているとするなら、釈尊は「ケーサリヤ渡河ルート」をとり、この辺りでガンダク河を渡られたことになる。

この『西域記』と同じ伝承が『法顕伝』<sup>(3)</sup>にも記されている。「クシナガラから東南に行くこと12由旬（体感距離としての1由旬=11.5km<sup>(4)</sup>）を採用すると138kmに相当する）に、リッチャヴィ族が釈尊の後を追おうとしたので、化して深い大きな堀を造って渡れないようにした。そして仏は形見として仏鉢を与え、彼らを家に帰らせた。そこには石柱が立てられ銘題がある」とされている。しかし一方ではここはヴァイシャーリーから西に5由旬（約57km）のところに当たるとしているから、そのストゥーパはガンダク河の西側でなければならない。したがって場所はケーサリヤとは一致しない。この伝承は法顕訳の「涅槃経」（本稿では『法顕』と略記してきた）の伝承と相応するが、その詳しい紹介は後に譲る。

ちなみにインドの博物館の考古学者や学芸員たちは、会う人会う人全てがケーサリヤが釈尊とヴェーサーリーの人たちと別れたところで、だから仏塔は鉢を伏せた形をしているのだと主張する<sup>(5)</sup>。

- (1) Google Earthでケーサリヤと重閣講堂址の距離を計測したもの。『ブッダの世界』はヴァイシャーリー北西約48kmとする。p.193
- (2) 平凡社「中国古典文学大系22」p.234
- (3) 「東洋文庫」194『法顕伝・宋雲行紀』p.088
- (4) 「モノグラフ」第6号に掲載した【論文4】「由旬(yojana)の再検証」参照
- (5) しかしそもそもインドの仏塔は全てがこのように鉢を伏せたような形をしているのであり、だからお釈迦様と別れたところだということのなら、インドの仏塔は全てその場所になってしまいかねない。考古学者ともあろう方がこのようなことを言ってよいのかと何度も口に出かかったが、我慢していた（以上は「雨期調査報告会」の報告書から）。

[5-2] 以上のように、釈尊の最後の遊行の、ヴェーサーリーからクシナーラーへ向かわれた道は、現在のインドでは「ケーサリヤ渡河ルート」が通説であるといつてよいであろう<sup>(1)</sup>。しかしこのルートがケーサリヤのところでガンダク河を渡っていたとは考えられない。仮に『西域記』の伝承を採用するとしても、その伝承ではヴェーサーリーから23kmしか離れていないとするのであるから、ケーサリヤの45kmは離れ過ぎているからである。

これに対抗して筆者が「ヴェーサーリー渡河ルート」を主張するについては先の他にも根拠がある。それは釈尊がヴェーサーリーから出られる際の「涅槃経」の記述である。その部分を少々詳しく紹介すると次のようになる。

『パーリ』(p.122)：(ヴェーサーリーの重閣講堂に比丘らを集めて3ヵ月後に般涅槃に入ると宣言された後)世尊は午前中にヴェーサーリーの町で行乞され、食が終って、行乞から帰ってきて、象が眺めるようにヴェーサーリーを眺めて (nāgāpalokitam Vesālim apaloketvā)、「阿難よ、これが如来のヴェーサーリーを眺める最後になるであろう (idaṃ pacchimakaṃ Ānanda Tathāgatassa Vesāli-dassanaṃ bhavissati)。さあ、バンダ村に行こう」と言われた。そしてバンダ村に住され、戒・定・慧・解脱の四法を説かれた。

『サンスクリット』(p.226)：(ヴェーサーリーの重閣講堂に比丘らを集めて一切は無常

であると説かれた後) 世尊は「さあ、アーナンダよ、クシタ村まで連れていってくれ」と言われた。そして ヴェーサーリーの市中を通りすぎて (Vaiśālīsāmantakenātikramam)、右に全身を巡らして象が眺めるように眺め、「これが如来のヴェーサーリーを見る最後の眺めである。ブッダはもはやこのヴェーサーリーに来ることはないであろう (idam Ānanda Tathāgatasya Vaiśālyāḥ paścimam darśanam na bhūya iha saṃbuddho Vaiśālim āgamiṣyati)」と言われた。そしてクシタ村に着き、戒・定・慧について説かれた。

『失訳』(大正 01 p.181 下) : (ヴェーサーリーの重閣講堂に比丘らを集めて3ヵ月後に般涅槃に入ると宣言された後) 仏は阿難に拘利邑に連れていってくれと言われた。仏は維耶を楽しみ、国中を過ぎて城門を出た時、身を巡らして右転し門を見て笑まれた。阿難がそのわけを問うと、「我が最後に維耶離を見るがゆえに」と答えられた。そして拘利の城北の林樹下に止まり、戒・定・慧を説かれた。

『白法祖』(大正 01 p.165 下) : (ヴェーサーリーにおいて3ヵ月後に般涅槃に入ると宣言された後) 仏は阿難を呼んで拘隣聚に行こうと言われた。そして維耶梨国を出る時、身を巡らして城を見られた。そのわけを尋ねる阿難に、「私は今日寿を竟り、またこの城に入ることはない。だから顧みたのだ」と答えられた。仏は拘隣聚の尸舎洹園に住され、心端について説かれた。

『遊行』(大正 01 p.017 中) : (ヴェーサーリーの重閣講堂に比丘らを集めて3ヵ月後に般涅槃に入ると宣言された後) 世尊は阿難に菴婆羅村に行こうと告げられ、跋祇を経由して菴婆羅村の一山林に住され、戒・定・慧について説かれた。

『法顕』(大正 01 p.193 中) : (ヴェーサーリーの重閣講堂に比丘らを集めて3ヵ月後に般涅槃に入ると宣言された後) 翌朝世尊は乞食して重閣講堂にて諸比丘とともに食を終ってから、乾茶村に行かんとして毘耶離城を過ぎた時(路経毘耶離城)、世尊は振り返って笑まれた。阿難がそのわけを問うと、「正にこの城の最後の見であるがゆえである」と答えられた。如来がこの言葉を言われた時、雲もないのに雨が降った。阿難がわけを問うと、天人が悲しんでいるのだと答えられた。離車の人々もこの言葉を聞くと、嘆き悲しみ、城門を出て遙かに如来を見て(出城門遥觀如来)、1劫を住してほしいと願ひ、仏につき随って引き返そうとしなかった。そこで世尊は神力をもって河水を化作され、つき随うことができないようにされた。如来は乾茶村の北林に住され、戒・定・慧について説かれた。

『雑事』(大正 24 p.388 下) : (ヴェーサーリーの重閣講堂に比丘らを集めて3ヵ月後に般涅槃に入ると宣言された後) 仏は阿難に重患村に行こうと言われた。そして広巖城の西北にある園林之界において大象王のように全身で右顧して広巖城を望まれた。阿難がそのわけを問うと、「これが如来の最最後に広巖城を望むのだ」と言われた。重患村に着くと升撰波林に住され、戒・定・慧について説かれた。

このように『遊行』を除くすべての「涅槃經」は、釈尊がヴェーサーリーを出てから振り返ってヴェーサーリーを眺められたとする。そしてその場所は破線で下線を付したように、「行乞から帰ってきて」「ヴェーサーリーの市中を通りすぎて」「城門を出た時」「維耶梨国を出る時」「乞食して重閣講堂にて諸比丘とともに食を終ってから、毘耶離城を過ぎた

時」 「広厳城の西北にある園林之界において」であって、これらはヴェーサーリーの町で乞食して食事を終ってからヴェーサーリーの町を出たときであることを示している。もしケーサリヤだとすると、釈尊の1日の遊行距離は平均して1由旬であり<sup>(2)</sup>、しかも80歳になられて病気がりの釈尊のこの時の遊行は普段よりはずっとゆっくりしていたから、45kmを歩かれるのに1週間ほどは要したはずである。したがってリッチャヴィ族の人たちと別れたのは、『西域記』のいうように「ヴェーサーリーの大城から西北へ五、六十里行ったところ」に相当するはずはないのである。

それではその場所はどこであろうか。城門のところではヴェーサーリーを眺める (apaloketi) というにはあまりに近すぎるし、といっても1kmも2kmも離れてしまうと眼前の樹木にさえぎられて町は見えなくなる。現在でもそうであるから、当時はなおいっそうの密林であったであろうからなおさらのことである。そしてもちろんここはヒンドゥス平原のど真ん中であるから、付近に小高い丘があるわけでもない。

このように考えると、この可能性のある地点はただ1点、現在の地理でいえば、ヴェーサーリーから Chhapra の方に向かう国道102号線と、Ambara 村で Kesariya の方に向かう道路が交差するところから西に直線距離で3.5kmほど行った、ガンダク河の Reva-ghaṭ の脇に架けられた橋を渡った地点あたりである。この橋を渡ったところで、すなわちガンダク河の向こう岸からヴェーサーリーの方を振り返ってみると、現在は河の向こうの木々の上に日本山妙法寺の白いストゥーパがきらきらと光って見える。ここからは重閣講堂まで約7kmである。

ヴェーサーリーの大林に建てられていた ‘kūṭāgārasālā’ は「重閣講堂」と訳される。‘kūṭā’ は山の頂のことで、‘agāra’ は「家」、‘sālā’ は「会堂」とか「講堂」と訳され、大規模な尖塔を有する建造物を意味する。根本有部律はそれは六、七重の建物であったとしている<sup>(3)</sup>。要するに ‘kūṭāgārasālā’ は尖塔をもった大きな建物であって、今の大きな日本山妙法寺の白いストゥーパが木々の上にそびえ立っているように、まさしく重閣講堂は木々の上にそびえて見えたであろう。重閣講堂はヴェーサーリーを象徴する建物であったから、ここに立ってヴェーサーリー方面を振り返ってみると、「これが最後のヴェーサーリーの眺めだ」と釈尊が感慨にふけられたのもむべなるかなと納得することができる。

おそらく『法顕』がいう「そこで世尊は神力をもって河水を化作され、つき随うことができないうにされた」というのは、このようなガンダク河を眼前にした状況をふまえての記述であったであろうと理解することができる<sup>(4)</sup>。

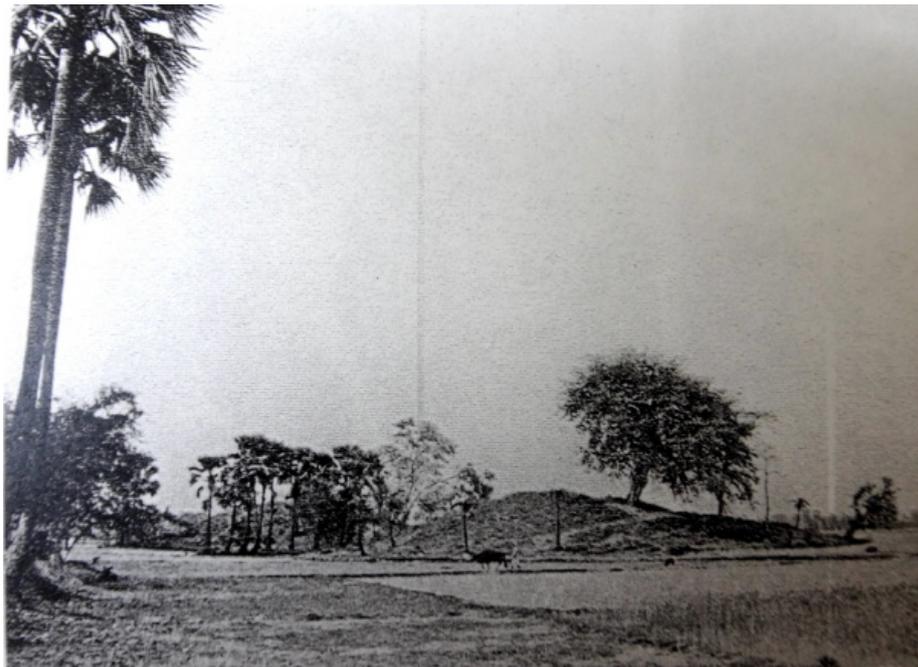
以上のように、釈尊がヴェーサーリーを出た時感慨深げに後ろをふり返られたとされることは、釈尊のクシナーラーへの遊行路はヴェーサーリーでガンダク河を渡るコースでなければならないことを示すのである。

(1) 『ブッダの世界』p.193も次のように記している。「釈尊がラージャグリハを離れ、最後の地クシナーガラに向かうべく、パーティリ村でガンガー河を渡り、ヴァイシャーリーを経由してガンダキ河の渡河地点に至る道すじは、現在、パトナからムザッファルプールを経てラクソールへと伸びているインドとネパールを結ぶ陸路にほぼ沿って、ややガンダキ河寄りであったと思われる。このことは、ガンガー河北岸のアショーカ王石柱が、ヴァイシャーリー、ラウリヤ=アララージ、ラウリヤ=ナンダンカル、ラームプールヴァと、ほぼ真北に向かって延びる河よりの線上に並んでいることから推察できる」としている。しかしラウリヤ=ア

ララージなどはすべてケーサリヤよりもさらに北西であり、今のクシナーラーに行く道とは関係がない。しかしこのことは釈迦国からヴェーサーリーに至るルートはクシナーラーを経由するルートのほかに、カピラヴァットゥから真東に向かって進み、ガンダク河を渡ってから、ガンダク河に沿って南東に下るルートもあったことを想像させる。バトナ博物館のパンディ博士もそのようにいわれていた。

- (2) 「モノグラフ」第6号に掲載した【論文4】「由旬 (yojana) の再検証」p.002 参照
- (3) 「泥薩祇波逸底迦 019」(大正 23 p.743 中)では、「リッチャヴィ族の人々は、比丘らの居を見て、自分たちと同じ高さ六七重の房舎を造ったが、時経て壊れてきた」としている。
- (4) 釈尊がふり返ってヴェーサーリーを眺めたところを中村元氏は次のように書いている。「釈尊がふり返ってヴァイシャーリーを眺めて、『ヴァイシャーリーは美しい』といって深い感懐に耽った場所はどこであるか？ それは解らない。峠のようなものはないか、と思っ探してみたが、アショーカ王石柱のところに立ってみても、またバトナからの往路・帰路ともに岡のような場所は全然見あたらない。一面の平野である。……中略……この文章から見ると、ヴァイシャーリーの、森のあるところから、右方に全身をめぐるして眺めたことになる。そうだとすると、その場所は、(1) いくらか高い丘で、(2) 森があり、(3) ヴァイシャーリーの北方であったということが知られる。これを現在の地勢にあてはめると、その土地の人々がいうとおり、ヴァイシャーリー市の西北方にあるピーマセーナ・カー・パッラーに比定できると思われる。以上は、その土地の人々のいうことを、文献にあたって再吟味してみたわけである」(『ゴータマ・ブッダⅡ』「中村元選集 決定版」第12巻 pp.232～233)

なおピーマセーナ・カー・パッラーの写真は『ブッダの世界』p.193 図版 2-156 に出ている。下の写真はこれをコピーさせていただいたものであるが、単なる盛り土のようで、向こう側に写っているヤシの木よりも高さは低い。これがどこにあるのかは記されていないが、この上に立っても木が邪魔になって付近の景色を見晴らすことはできないように思われる。しかし中村元編著、奈良康明、佐藤良純著『ブッダの世界』(学習研究社 1980年7月)では、「リッチャヴィ族の人々をなだめるために、釈尊が神通力をもって人々との間に大河を現したとする伝説は、釈尊がヴァイシャーリーの北でガンダキ河を渡り、ここでリッチャヴィ族と別れたことを暗示しているのかも知れない」としている。p.192



[5-3] インドの学者がケーサリヤでガンダク河を渡ったとする「ガンダク左岸北上説」をとるもう一つの理由には、現在の地理でいうとガンダク河の右岸は **Saran** 県と **Siwan** 県になるのであるが、インド考古局が「シワン県では今までも仏教遺跡は発見されなかったし、これからも発見される可能性はない」というように、この地方には仏教の遺跡が発見されていないということがあられるかもしれない。

しかしこれはあまり学問的な話ではないが、地元の新聞には遺跡があるのに考古局が見つけないので嘆願している、といった記事が出ている。そこでわれわれはこの地方を調査してみようと考えたことがあった。この地域はマガダとヴェッジとコーサラとカーシという釈尊が活動した国々に囲まれた、まさにど真ん中の地域であるにもかかわらず、こういう意味では暗黒のままに残されているからである。

そこで2001年の8月14日のことであったが、その2年前の現地の新聞にクシナーラーの涅槃寺の隣にあるビルマ寺院の住職であられる **Bhavant Jee** (ババジー) こと **Gyaneshwar** さんがシワン県の仏教事情に詳しいという記事がでていたので、その記事を思い出して、この方にお話を頂こうと思って訪問したことがあった。**Gyaneshwar** さんは、「シワン県に釈尊あるいはアショーカ王時代の道路が発見された、今は雨期で埋め直した」と言っておられたので、現地のこのような方面に詳しい信頼できる人を紹介いただきたいと申し上げたところ、「信頼できる人はいない。インド人は金もうけばかり考えているので信頼できない。私の方からジープを出すから一緒に行こう。ただし今は雨期で時期が悪いから、来年の1月にいらっしゃい。ホテルは高いから自分のところに寝泊まりすればよい」というありがたい申し出を受けた。しかし筆者はすでに高齢になっていて体力に自信がなかったので、その話はそのままになった。

このように古代の **Siwan** 県と **Saran** 県の仏教事情はよくわかっていないが、この地域の調査が進むと、あるいは仏教遺跡が発見されることになるかも知れない。もしそうなれば筆者がここに主張する「ヴェーサーリー渡河ルート」が考古学によって証明されることになるわけである。

なお先に紹介した **Dr.Jagdishwar Pandey** の著書では、釈尊の最後の遊行の経由地を次のように比定している<sup>(1)</sup>。

**Bhaṇḍagāma** : **Siwan** 県の **Baḍahaiyā** の村の近くの **Bhalluā**

**Hatthigāma** : **Siwan** 県の **Hathagāni**

**Ambagāma** : **Gopalganj** 県の **Kālisthāna** の近くの **Ameyā**。

**Jambugāma** : **Gopalganj** 県の **Jamunahān**

**Bhoganagara** : **Gopalganj** 県の **Bhore**

現時点では上記のうち **Bhore** を除いて、筆者はこれらの地名を地図上に確認することができないでいるが、しかし釈尊がもし **Kesariya** のところでガンダク河を渡られたとすると、シワン県はクシナーラーに行く道より南になり、ここにあげられた **Bhaṇḍagāma** と **Hatthigāma** は「ガンダク左岸北上ルート」からは外れることになる。また **Bhoganagara** に比定されている **Gopalganj** 県の **Bhore** は地図上で確認できるが、ここは現在ケーサリヤ方面からクシナーラーに行く道路よりはだいぶ西の方にそれている。しかし筆者の想定する「ヴェーサーリー渡河ルート」なら、これらの問題も解決できるように思われる。

ただし実際的な検証はもっとこの辺の事情が明らかになるまで待つよりほかない。

(1) p.031 以下

[6] 以上、「涅槃経」に記される釈尊の最後の遊行記事のうち、ガンガー河の渡河地点と、ヴェーサーリーに入られる時と出られる時のルートを考察した。その結果をもとにして「涅槃経」に記される釈尊最後の遊行ルートを述べると次のようになる。

釈尊は王舎城の霊鷲山で、阿闍世王のヴァッジ国侵攻の可能性についての質問をきっかけとして、釈尊没後のサンガの運営のあり方についての説法をされてから、次の雨安居を過ごす予定のヴェーサーリーに向けて出発された。その時の遊行ルートは、阿闍世王がヴァッジ国との戦争に備えて城を築いていたパータリ村を視察するために、当時は幹線道路ではなかったと思われるパータリ村を通るルートを選ばれた。すなわち釈尊はアンバラッティカーの王の別荘を通り、ナーランダーを過ぎたところで直進するのではなく西北方面へのルートをとってパータリ村に到着された。

そして釈尊はパータリ村を視察された後、建設中のパータリ城の西門を出られ、その近くにあった渡し場からガンガー河を渡られた。城を建設し、渡し場も整備していたマガダの大臣スニーダとヴァッサカーラはこれを記念してこの門を「ゴータマ門」、渡し場を「ゴータマの渡し」と名づけた。「ゴータマの渡し」は今の「ブッダガート」のところに相当し、ここはガンダク河がガンガー河に合流する地点よりも上流にあり、したがって釈尊がガンガー河を渡られた対岸はガンダク河の右岸の河口近くであったことになる。今の **Sonpur** である。

この後釈尊は「ガンダク河右岸（西岸）北上ルート」をとってガンダク河の右岸を北上され、ヴェーサーリーの対岸にあったコーティ村のナーディカーの渡し場からガンダク河を渡られた。

このガンダク河を渡河された対岸はヴェーサーリー城の西北の郊外にあたり、この辺りにアンバパーリ園があったので、釈尊はヴェーサーリーの市街に入るよりも前にまずこの園に立ち寄られ、遊女アンバパーリーからの食事の招待を受けられた。

釈尊はこの年はヴェーサーリーで雨安居を過ごされる予定であったが、あいにくの飢饉であったので、弟子たちには銘々知己や親類縁者を頼ってヴェーサーリーの近辺で雨安居するように指示され、自らは阿難と二人でヴェーサーリーの市街を通り抜けて、ヴェーサーリーの南東の郊外にあった竹林村で雨安居を過ごされた。この雨安居に入る時がちょうど入胎から数える釈尊の80歳の誕生日で、このとき瀕死の病に罹られ、入滅の決意を固められた。

雨安居を終ると近辺の弟子たちを重閣講堂に集められ、3ヵ月後に入滅することを宣言されて、クシナーラーに向けて出発された。釈尊はこの時にも来た道を再び通られ、アンバパーリ園のそばでガンダク河を渡り、向こう岸のナーディカの渡しに立たれた。そのとき釈尊は後ろを振り向き、川越しに木々の上に見える重閣講堂を眺めながら、名残惜しそうに「これがヴェーサーリーを見る最後だ」と言われた。すなわち釈尊は「ヴェーサーリー渡河ルート」をとられたわけである。

そして今度はコーティ村のところでパーヴァーの方に向けて右折され、ハッティ村、アンバ村、ジャンプ村、ボーガ市を経由してパーヴァーに着かれた。現在の行政区でいうと、釈尊はガンダク河を渡った後、ビハール州のサラン (**Saran**)、シワン (**Siwan**)、ゴーパール

「涅槃経」の遊行ルート

ガンジ（Gopalganj）の3県を経由して、現在はウッタル・プラデーシュ州のデオリア（Deoria）県のパーヴァーに到着されたことになる。パーヴァーでも釈尊はチュンダの供養した食事によって病気になられ、休み休み漸くの体でクシナーラーに到着され、ついにここで入滅された。

これが「涅槃経」に描かれる釈尊の最後の遊行ルートである。